

野上の一声坂

むかし、野上の越地に、菅間弥五郎高久という弓の名人がいてな。また、上境には、山口大輔というこれもまた弓の名人がいたと。この二人は、とても仲が良くてな、「ほら、今日はうさぎを捕ってきてやったぞ。そばのだしにでもして食えや」そうやって、お互いに行ったり来たりして、弓の話やら狩の話などを、自慢し合っていた。そして弟子たちも大勢いてな、「うちの先生は、那須与一宗隆のように、扇も的だって射抜けるだろうよ」「おらの先生なんかよ、イノシシだって。鷹だって、一度たりとも射ち損じたことはねえぞ」などと、これまた自慢話の花が咲いたと。そんなある日、弥五郎の家へ大輔が、「やあ、こんにちは、今日は遊びに来たぞ」

なんて訪ねてきたと。そして、酒なんぞごちそうになった。「おらよ、この間、山鳥とったぞ。その山鳥が羽広げて、すーと空飛ぶ姿は、黄金色に光り輝いて、てんできれいなもんだな」「うん、そうだな。ところで俺はよ、こないだ鶴をとっちゃったよ。その鶴よ、羽根むしって囲炉裏で焼くんだ。そして、熱く沸かした酒を、どんぶりにいっぱい入れてな、そこに、こんがり焼けた鶴を、ジジーンと入れんだ。するとな、油がジワーと浮いてくるだ。それをゴックン、ゴックンと飲むんだ。ああうまかったな」「そうかい、俺、おめえの話聞いててよ、よだれが出てきちゃったよ。今度とったときは、俺にもごちそうしてくれやな」なんて楽しく飲んで自慢話をしてるうちに、「あれ、だめだ、だめだ、日が暮れてきちゃったぞ。いやあ、かあちゃんよ、酒はうまかったし、つまみもうまかったぞ。ごちそうになったな」といって大輔は弥五郎の家を後にしたと。そして、江川の橋を渡り篠沢の坂道まで来たときのことだった。ほろ酔い機嫌の大輔は

「そうだ、弥五郎をちつとからかつてやるべ」と考え、越地こえじに向かって、どなつたと。

「おおい。弥五郎やごろうどん、弥五郎やごろうどん。お前がどんなに弓の名人だつてよ、このうすぐらがりでは、わしを撃つことはできねえだらうよ」

すると、弥五郎やごろうのでっかい声こゑがどなりかえつてきたと。

「大輔だいすけどん、おぬし、こつちを向いて、大股おほまたあけてそこにたつてみる。そして、でっかい

声こゑで、一声ひとこゑ、『おおい』とどなつてみる」

大輔だいすけは、弥五郎やごろうの言ことつとおり、大股おほまたあけて越地こえじに向かって、

「おおい」

と、どなつたと。

すると、その声が終わるか終わらないうちに、ビューンとするどい矢鳴りやなと共に、矢

は、大輔だいすけの股またぐらを通り抜けて、後ろの土手にズブツと突き刺ささつたと。

「大輔だいすけどん、そなたの一声ひとこゑでねらいを定めたぞ。だがな、おまえの命まではもらわねえがらよ。どんなもんだい。ワッハッハ」

と、弥五郎やごろうの笑い声こゑが、薄うすぐらがりがりをぬつて響ひびいてきたと。

このことがあつてから、村の人たちは、この坂を「一声坂ひとこゑ坂」というようになったと。

おしまい

鳥山の民話より